

# 宰府画報

第 12 号

2022 年 5 月  
(令和 4 年)

発行  
太宰府市教育委員会  
文化財課



バックナンバーはこちらから

## 調査見聞

### 秋圃の生年

#### 秋圃の生年

現代のわたたくしたちは、この世に誕生したとき戸籍に登録され、その寿命をまっとうしたとき除籍されます。思えば、そうした戸籍の制度というものがなかった時代、その人の年齢を知ることがかなり難しくなります。著名人にしてもそうですし、普通の人はなおさらです。

太宰府画壇の祖ともいべき齋藤秋圃の場合も同じです。その年齢に関していえば、昭和と享年は伝えられていて、そこから逆算して生まれた年を推測してきました。秋圃の場合(数え年ですが)、安政6年(1859)に92歳でなくなることが伝えられ、逆算し

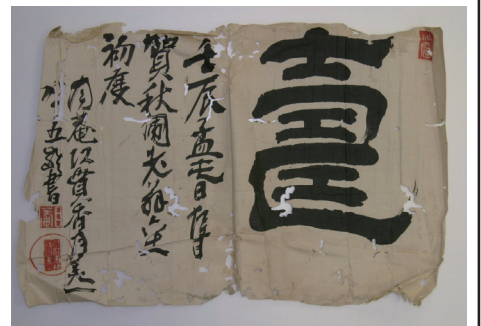


署名部分「時年九十有二筆翁秋圃」

て明和5年(1768)に生まれたと考えられていました。18世紀の後半に生まれたことになりす。ただそうすると、晩年の絵馬などの制作に関連して、その落款の年齢の記載と絵馬が奉納された年号にいくつかの齟齬が生じることができました。その理由としていくつかが考えられてきましたが、いずれにしてもそこに記された奉納の年号と秋圃落款の年齢がうまくあわなくなりました。

#### ひとつの史料

そうしたなか、2003年の春に齋藤家において見いだされ、先年太宰府市に寄贈された、太宰府市の文化財にも指定された齋藤家資料のなかに、ある1枚の史料がのこされていました。そこには齋藤秋圃の生年を教えてくださいました。そこには齋藤秋圃の生年を教えてくださいました。そこには齋藤秋圃の生年を教えてくださいました。



「壽」一文字 齋藤家資料

生涯のなかで「壬辰年」は2度あらわれます。最初は安永元年(1772)、次が天保3年(1832)です。そこでこの史料は、天保3年孟春(1月)に、月菴から秋圃におくられた還暦の祝詞と考えられます。文字の史料を以て安永元年の生年が語られるようになりました。従来の生年から4年下ることになりました。まさに本年は秋圃生誕250年ということになります。

#### 未解決の年齢

この史料の出現により秋圃の生年を知ることができましたが、先に記した絵馬の落款と奉納年との齟齬、あるいは享年92という年齢の問題がすべて解決したわけではありません。生年から考えれば88歳で亡くなっているはずですが、どうしたら92歳という年齢に届くのか、という問題をもうすこし考える必要があります。

ちなみに、香月美一は長崎の人、役所に勤め、絵を描き、俳人としても名が知られています。秋圃より20年余の年長であり、この祝詞を贈った3年後に亡くなっています。

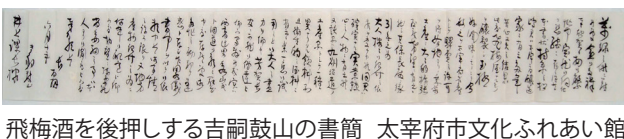
(橋富博喜)

## メイショ メイブツ 飛梅酒

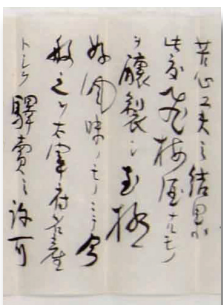
現在でも、太宰府を象徴する梅をモチーフとした土産物が多く作られています。そうした流れは、絵師たちが生きた時代にもありました。

昭和の初め、ある醸造家が苦心のすえ梅酒の醸造に成功します。彼の名は松嶋謙三。松嶋はその酒を「飛梅酒」と名付け、友人である絵師・萱島秀山に相談し、容器として梅型の瓶をあつらえています。飛梅酒を太宰府の名産品として売り出すべく、販路を拡大し駅での販売を切望する松嶋のため、萱島秀山、吉岡鼓山が書き綴った関係者への口添えの手紙が残っています。

飛梅酒がどれぐらいの期間販売されたかは分かりませんが、それから20年以上のちに、太宰府天満宮の梅の実を使って梅酒を作る企画がもちあがった際、秀山の息子・秀峰が松嶋の飛梅酒の瓶を保管していたことから、後年の梅酒の瓶にも同じデザインが使われたといえます。(高松麻美)



飛梅酒を後押しする吉岡鼓山の書簡 太宰府市文化ふれあい館



9~14行目部分

苦心工夫之結果  
此度飛梅酒ナルモノ  
ヲ醸製シ至極  
好風味ノモノニテ今  
般之ヲ太宰府名産  
トシテ驛賣之許可

# 逸品探訪

太宰府の絵師に関連する逸品・名品を紹介しします

吉嗣梅仙・拜山作  
なかしまけしゆうたくふすまえ

## 【中島家住宅襖絵】

江戸時代から続く旧家の襖絵

英彦山の北麓に位置する福岡県添田町。中島家住宅はこの町の中心部に所在しています。中島家は江戸期にはハゼ蠟や醤油を扱う商家として、明治期に入ってから酒造業や銀行業などで財を成した実業家として知られ、添田の公共事業や神社への寄進などを積極的に行った篤志家でもありました。

広大な敷地に現存する主屋や酒蔵、醤油蔵など一群の建物は昭和52年に国の重要文化財に指定され、平成25年に添田町の所有となったのち、同28年から国の補助を得て、解体を伴う大がかりな保存修復事業が行われました。工事は令和3年度に無事に完了の運びとなり、一般公開もなされています。



(上) 梅仙《瓶花図》紙本着色 各面 174.5 × 67.8cm  
(下) 拜山《山水図》絹本墨画 各面 33.5 × 44.0cm  
明治 19 年 (1886) 福岡県添田町管理

### 父子合作の襖絵

この住宅の仏間に設えられている4面続きの襖に梅仙の絵が、仏間隣の座敷にある違い棚の地袋(床部分の収納スペース)に拜山の絵が描かれています。梅仙の襖絵は、中国風の花瓶や花籠に、南天、梅、仏手柑、牡丹、石榴、葡萄、菊等々、四季折々の縁起の良い花や果実を、襖4面をひとつのキャンバスとして瀟洒な雰囲気とともに描いています。一方の拜山の小襖は、やわらかく丁寧な筆づかいによる山水図が描かれており、各面に自賛が記されています。賛のひとつには耶馬溪を詠んだ詩があり、当地をイメージして描かれたものかもしれません。

### 豊前地方の足跡

本図が描かれた明治19年は、梅仙70才、拜山41才の年です。中島家住宅はこの2年前の明治17年に大規模な改修を行っていたようで、襖絵の制作はこの改修を機に依頼されたものかも知れません。絵師として、文人として不動の地位を築いていた梅仙・拜山父子によるこれらの力作は、中島家との浅からぬゆかりが想像され、当地に二人の名声が届いていたことを語っています。



建物と同様この襖絵もかなり傷んでいたようですが、このたびの保存事業の際に修理され、美しい姿を取り戻しています。(井形栄子)

※住宅公開日時などの詳細については添田町役場まちづくり課(☎0947-182-1236)までお問い合わせください。

いちまい  
画稿鑑賞

### 齋藤家資料

## 【山鳥図】

キジ目キジ科に属する山鳥は、深い山の中に住むことからその名があります。体の大きさは雉子とほぼ同じですが、オスの山鳥は雉子より尾羽が2倍近く長く、胴体は雉子のような深緑色ではなく、まだらな茶色をしていますので、これは山鳥のオスだと判断されます。縦47センチ、横約1メートルの画面には、ほぼ実物大の山鳥が写實的に描かれ、部分的に淡い彩色が施されています。余白

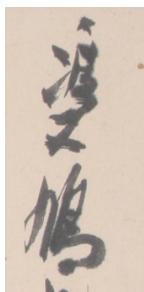
には頭部や尾羽の部分スケッチもあり、胴体の上方あたりには本物の羽毛が貼り付けられています。さらに画面には「シャ曲」「朱エン曲」などの書き込みもあります。「シャ」は代赭色(赤茶色)、「エン」は臙脂色(濃茶色)のことで、「曲」はくま取り、すなわち暈かしや濃淡をつけるという意味です。実物を正確に写しつつ、実際にどんな色をしていたのかではなく、どのように彩色するかへの注意書きがある点は、画稿ならではの点と言えるでしょう。(井形栄子)



紙本着画淡彩 47.0 × 108.8cm

ひとこと  
くずし字

## 【双鳩】



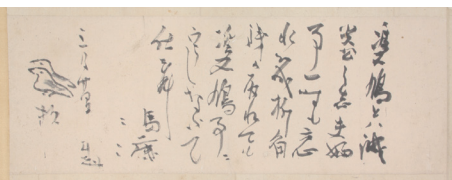
齋藤秋圃は葵、衛、亦助、双鳩、土筆翁など複数の号を使用

していたことが知られます。その中でも今回は「双鳩」という字についてみていきます。「双」は旧字の「雙」を崩したもので、左側の「隹」が「シ」になっています。「鳩」は左の「九」が「力」に、右の「鳥」は下の点4つが省略されていますが、原形をとどめています。

「双鳩」とは文字通り二羽の鳩を表し、画題として多くの絵師が作品をのこしています。



(木村純也)



双鳩宛仙厓和尚書状 齋藤家資料

齋藤家資料にも複数の画稿が確認されており、自らの雅号としたことから何らかの思い入れがあったと思われる。この文書は秋圃と親交のあった仙厓が秋圃に宛てたもので、「双鳩」という号が秋圃らしいとして、二人の親密さを伺わせる内容となっています。宛名の「双鳩様」を可愛らしい二羽の鳩で描いている仙厓の洒落た表現にも注目です。